

＜意見交換＞

中垣内：これから30分程時間がありますので3名の先生および参加者の皆様と意見交換したいと思っております。先に参加者の質問等を受け付けます。なお参加者の方々のご発言の際には、ビデオを開いていただき、ご所属とお名前をお伝えいただいた上で、ご質問いただければと思います。

参加者A：大変貴重なご報告をいただきまして、大変興味深く、勉強になりました。まず感想ですが、この協力者会議のテーマ、「地域社会資源と行政の連携によるスポーツを通じた地域づくり」というネーミングが絶妙だなという感想をもっております。何故絶妙と感じたかを申しますと、スポーツという用語の概念が非常に広く、その広い概念をもつスポーツというのが町づくり、地域づくりに本当に貢献しうるのだなということを感じてきたからです。我々に対するなげかけとして非常に素晴らしいテーマだなと改めて感じたところでした。それでは内田先生、笹山先生、西田先生に1つずつお尋ねをさせて下さい。

まず、内田先生に対する質問です。私も自治体でのフィールドワークを長年に渡ってやっていますが、各市町村単位の行政の中でスポーツ振興やスポーツ推進は、教育委員会の社会体育課や社会体育係などが担ってきた部分が多かったわけです。それが徐々に変化を見せ始めているところもあります。是非、先生の持論をお聞かせいただければと思うのですが、各市町村及び各都道府県におけるスポーツを担当する部局はどこが担当すれば非常に機能的であるのか、機能性が高くなるかに関してご意見をいただければと思います。

続けて笹山先生に教えていただきたいのですが、ご発表のなかで、中垣内先生との出会いによりALHの活動が劇的に変わったとおっしゃいました。要するに、産官学、民官学という関係の中で学に属している研究者が産と官の仕組みを変えていける可能性があるのだらうと、その実践的な活動を中垣内先生がやられてきたとするならば、中垣内先生との出会いで何が波佐見町の中で変わったのかをもう少し踏み込んで詳しく教えていただきたいと思っております。

最後、西田先生への質問です。熊本県は九州で唯一、学校教育制度の中で、小学校運動部活動制度がありま

した。それが社会体育に移行して、3、4年たっていますが、A-lifeなんかで小学校の部活動の受け入れが現在どのような状況にあるのかを教えていただきたいのが1つ目の質問です。それから全国的な動向ですが、2025年度を目途に中学校の部活動も社会体育移行の動向にあります。今後、中学校の部活動の受け入れの用意があるのか否か。あるとするならばこれからどのように動いていくのかについては是非お教えいただきたいです。

中垣内：ご質問ありがとうございます。それでは内田先生から回答をお願いします。

内田：歴史を振り返ってみますと、やはり教育というところから日本のスポーツは始まっているので、スポーツ行政は教育委員会から派生をしていったという背景があります。今は法律が変わって市町村も都道府県も、いわゆる知事部局、組長部局でスポーツ振興など単独で行っているところがあります。今のこの組織的なスポーツ課が単体であるというのは、とても大事なことだと思います。しかし、一方で一般行政職は、異動があります。例えば、建築や保健福祉行政をみるとやはり専門職の人が必要です。ところがスポーツ振興に関しては、なかなか専門職の人、長年そこに携わる人がなかなかいません。これが今変わるべきところではないかなと思っています。国全体で制度設計そのものを今、変えるときなのではないかなと思っています。何らかのスポーツ専門職を行政の中にももつべきなのではないかと思っています。確か熊本県のある総合型地域スポーツクラブには行政の方がお1人いらっしゃいますよね。確か、スポーツ専門職ではないですが、その方に聞けばその町のスポーツ行政のことが全部分かるようです。そのような行政のあり方、専門職みたいなものをこれからつくっていったらどうかと思っています。

参加者A：大変参考になりました。ありがとうございます。

中垣内：それでは笹山先生、お願いします。

笹山：中垣内先生との出会いについてですが、長崎県に先生がいらっしゃった時代に長崎県と大学と総合型

地域スポーツクラブの共同で連携する事業がございました。その中でスタッフに対する教育をしていただきました。元々我々も toto の助成金で、各インストラクターを雇用し、事務局が雇用した際の報酬を一部いただくというシステムで運営してきたのですが、どうしてもそれでは運営がやっていけない部分もありました。そこで中垣内先生にスタッフに対して運動指導に関する教育をしていただいたことで、スタッフの自立化に繋がりました。その中で、日本スポーツ協会のスポーツプログラマーや健康づくり事業財団の健康運動指導士の資格をスタッフが取得するようになり、自主事業が可能となったことが1つの大きな点でした。もう1つは、行政との信頼関係というところで、どうしても我々が話しをしても説得力にかけるところもありましたので、そこを大学の先生が「総合型地域スポーツクラブでもやっていきます」ということを行政に伝えていただくことで、「そうでしたら安心してまかせろ」というように行政からも委託をいただくことができました。そしてそれが現在にいたっています。

参加者 A：なるほど、よく分かりました。

中垣内：1つだけ補足させていただきたいのですが、長崎県のスポーツ振興課の中に広域スポーツセンターがありまして、そこにキーマンがいました。その方は総合型地域スポーツクラブをいかに活性化させるかということを考えていました。まずは、長崎県の中で私が働きかけたのは、スポーツ振興課と健康増進課、介護福祉課の3つのところからそれぞれ代表者をだしていただいて、課横断の話し合いの場を年間5、6回もち、県政の中でスポーツや運動を中心とした事業がどのように展開されているかということを話し合いました。次に波佐見町に ALH がありましたので、波佐見町でもそのようなことをできないかということで、長崎県が主導で波佐見町に働きかけをして、まずは総合型地域スポーツクラブを所管されていた教育委員会を中心に町の健康づくり課、介護福祉課から代表を募って、年に5、6回、運動やスポーツ振興に関わる話し合いをやりましたね、笹山先生。

笹山：はい。

中垣内：会合をもって、まずは町で動いている事業を

もう1度見直してみようと、そしてそこに総合型地域スポーツクラブが関わっていけるかということをお話して話したところがスタートになるかなと思います。私も今回、発表を伺って驚いたのですが、それが4、5年たって、活動がさらに多岐にわたっているなど印象を受けたところでした。

参加者 A：なるほど、大変参考になりました。ありがとうございました。

中垣内：西田先生、よろしくお願ひします。

西田：先ほどお尋ねいただいた熊本県で長く続いておりました小学校運動部活動の社会体育移行についてですが、県下一斉に平成31年度に移行になるという指示がでました。南関町では、1年前倒ししまして平成30年度からその形になりました。最初にご紹介いたしましたように南関町には4つの小学校があるのですが、それぞれがそれぞれの形で小学校の運動部活動をやっておりました。大体週2回の活動の形態だったと思います。学校ごとで部活のやり方も種目もバラバラでした。複数種目や単一、季節性を取り入れたりとバラバラでしたので、町主導で社会体育移行事業を立ち上げて、その委託を A-life なんかんが受けました。その際、通年で何かの種目の1つに偏ってしまっただけでは皆のニーズに答えられないということもありますし、すでに A-life なんかん自体のスポーツクラブの会員になっているお子さんも多かったです。元々小学校の運動部活動というのは、地域での子供たちの運動量を補完することや運動をしないであろうお子さんたちを下支えしていく意味もありますので、色々な側面、色々な動きを楽しんでいただくということが町の方針でもありました。ですので、毎月、月替わりで色々な種目を取り入れて楽しみ主体といいますか、何かの単一種目に移行できるような形のプログラムづくりをしていきました。その中には実際うちのスポーツクラブの方にある種目で指導者にきてもらって、「これ1年間やってみて楽しかったな。それじゃ、A-life なんかんソフトテニス、卓球に実際行ってみようかな」というきっかけをつくらせてもらって、それから中学校に入って、中学校の運動部活動へ繋がっていった経緯があります。それが小学校の運動部活動の社会体育移行事業の形になります。

2つ目に質問いただいた中学校部活動の社会体育移行の件なのですが、これは熊本県がスポーツ庁の事業を受けているものが今、進んでおりまして、現場の実例モデルといたしますか、その1つとして南関町が委託を受けています。南関町が令和2年度から会議など立ち上げてはいたのですが、実際令和3年度になりまして、県から再委託を受けまして実際に協議会をやりながら、先生方との研究会や地域のスポーツ指導者の勉強会をやって今も会議を重ねているところです。会議と保護者アンケート、当事者アンケートなどをとって進めているところなのですが、先ほど最初にいいましたように、実際のところ、中学校の生徒が大体160人ぐらいしかいないので、1学年に2クラスといたしても余裕の2クラスのような感じでして、そして種目も多なくて部活で人数の取り合いのような状況でもあります。団体競技もしづらような構成になってきたことや10年、20年前から地域のスポーツ指導者がその種目指導者として入っていた経緯もあり、南関町としてはスムーズにこのまま移行できるのではないかとこのところがあります。数年前から2部連といたしますか、実際、A-life なんかの指導者が中学校の部活動の指導者となっている状況もあり、生徒がA-life なんかの会員となって、中学校の部活動での活動後、夕方以降はA-life なんかで活動するといった種目が複数あります。ですので、スポーツ活動の過熱化に結びつかないようになどの取り決めをうまく制度化していけばある程度うまくやっていけるのではないかなと感じています。

参加者A：是非、今後も見学等、継続して情報交換させてください。ありがとうございました。

西田：ありがとうございました。

中垣内：それでは、私から内田先生に1つお尋ねしたいのですが、今、二つの団体から活動報告をしていただきましたが、二つの団体とも先生がキーワードにあげた例えば「ソーシャルキャピタル」、「社会関係資本」、「ボトムアップの取り組み」、「あるもの探し」など、何となく1つ、2つずつ含まれている活動だったと思うのですが、この二つの団体以外にももしこういうところで連携して、こういう取り組みをやっているという先生をご存知の中で事例的な内容があれば教え

ていただきたいと思います。

内田：福岡県でいいますと春日市に春日イーグルスという団体がありまして、ここは、歴史が古くて1984年に創設されたと思います。元々は中学校の夏休みのサッカー教室から始まって、そこで指導していた学校の先生が最終的に学校の先生を退職されました。すると、中学生のとき教室に参加していた子どもたちが卒業したら、その親御さんから「高校になっても続けて欲しい」との要望があり、高校になってもその教室が継続されました。その後、高校を卒業した子どもたちが大学にいて、地元春日市に帰ってきたときにその子どもたちがそのサッカー教室で指導者になりたいということで、これはいい意味で循環しているかなというところなんです。この春日イーグルスもこうしたソーシャルキャピタルをやりながらビジネス展開もきちんとやっていて、私がいた頃で年間6,000万くらいの売上があって、NPO法人でも確かスポンサーがついています。ここは、私が個人的にみても材的資本と社会関係資本というものをきちんとバランスよくされているところだと思います。先ほど、西田先生が最後のスライドで示していたようにA-life なんかんでは現状のシステムに甘んじることなく毎年、毎年、色々な取り組みにチャレンジされていて、きちんとまわっているかなというところなんです。

それからもう1つは、福岡県の椎田コミュニティクラブ、そこは元々、行政と非常に密着している体育指導員の方を中心として総合型地域スポーツクラブを立ち上げようということで、ここも非常にローカルな町だったのですが、初めから行政の人も行政の立場としてよりは一市民になって総合型地域スポーツクラブと一緒にやろうということで、たまたま2004年に日本体育協会が育成支援事業を始めたとき、この町が手をあげました。ここは売上の的には、わりとボランティアベースでやっているところではあるのですが、わりと高齢化が進んでいる町でありながら高齢者を主体とした事業展開をしています。ここもスポーツだけではなくて、子どもとおじいちゃんが将棋をやる教室や皆でソフトバンクフォークスの試合にバスツアーで行こうなど、楽しそうな取り組みをしているイメージのあるクラブです。このようなところでしょうか。

中垣内：ありがとうございました。社会関係資本と財政

資本とのバランス、やりたいことがあっても財がないといけないですし、財だけあっても主旨に則らないといい活動ができない、つまりそれらのバランスの好循環を生み出すような活動をしていくことが重要であるのかなと今のお話を聞いて感じたところでした。ありがとうございます。

今度は笹山先生に一つ質問をしたいのですが、今回の発表を聞かせていただいて、かなりうまく事業展開ができていたのだなということを感じさせられたのですが、部局を横断して色々な活動をされていますが、おそらく困難だったことがいくつもあったかと思えます。行政との連携の中で、どのような難しい点があったか、どのようにしてうまく連携できるようになったかということが事例的にあれば総合型地域スポーツクラブの方々にも何かヒントになるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

笹山：先ほども伝えたのですが、信頼の構築をするまでが1番大変だったところなんです。その信頼関係を築けてからは、いろいろなことが早く展開できました。関係する行政の部署の方は異動することがありますが、信頼関係ができていたので、こちらの新しい提案も地域のことを考えてのことと捉えていただけ、多くのことを受理していただけるようになりました。信頼の構築に関しては、最初はお手伝いに近いところもあって事業を実施するにあたっていただける謝金は低単価というところもありました。しかし、それでも数をこなして実施していくうちに信頼構築に繋がって、今では個人と行政との関係ではなく、ALH団体と行政との関係になるので、そのような信頼関係の中で適正価格まであげていけたかなということもあります。そのような適正価格によりやく折り合いがついたところであっても、良い事業を継続していくためには、どうしても金銭的なところも運営には必要になってきますので、この形を今後も継続していきたいと考えています。

中垣内：手弁当的なところからスタートして、行政の要求に応えつつ一生懸命そこから信頼を得ていったという状況だと思うのですが、その信頼を得るために専門的な知識をさらに深めたり、指導技術を深めたりということをするのはかなり重要になってきますよね。

笹山：そうですね。

中垣内：ありがとうございます。皆さんから質問がなければ、次は西田先生にお聞きしたいのですが、西田先生の団体は、町の行政のみならず、広域的な行政の方々、他の団体の方々、大学もいくつかかなり連携されていますよね。

西田：はい。

中垣内：私、大学の立場からお聞きしたいのですが、大学と連携していく中で、大学に対して何を求めていますでしょうか。

西田：いくつかあるかと思うのですが、人的面でいえば、例えば、大学生の方のボランティアがきていただけるといいなということがあります。また、何といっても最高学府として研究、私たちができない数値化や立証、そこが今の私たち、A-lifeなんかや南関町としては、連携する価値といいますか、そこがお願いしたい部分になります。もちろん学生のボランティアもありがたいです。

中垣内：例えば、元気システムの中でも高齢者の方々がどれだけ客観的に体力が上がったかや現在では障害者スポーツに関する調査も実施されていますが、第三者的に障害者スポーツとの連携について評価をしてももらえるような状況がつけれるといいということでしょうか。

西田：そうですね。ある程度体力測定はやっているのですが、数値はもっているのですが、分析ができないという状況がいつもありまして、ですのでこちらが予算を準備できるときはいいのですが、できないときは逆に先生方で、例えば自分は子どもの体力向上に興味があるので、研究費はもっているけれどデータがないという方と連携ができると1番いいなということがあります。一部研究が進んでいるところもあれば、データだけでももっていてもったいないということも実際あります。

中垣内：結構、データもとられているのですよね。

西田：そうですね。体組成計なども、6年ぐらいとっています。小学生も、中学生も毎年、全員とっています。

中垣内：そのようなところを縦断的に評価していただいて、A-life なんかんとしての活動によりどのような効果がでているか検証していただき、そのエビデンスに基づいて活動ができればさらにうまくいくとくことですね。

西田：はい、そうですね。

中垣内：ありがとうございます。そろそろ時間になりますが、先生方に今回の会議のご感想なり、言い足りなかったなということがありましたら、一言、二言、感想等述べていただければと思います。内田先生、いかがでしょうか。

内田：スポーツ界の中では、先ほども出てきました中学校部活動の地域移行の話もあるのですが、まさしく今、昨年の東京2020プラスワンもありまして、スポーツ界は転換する時期なのではないかなと思うのです。ただ、この転換するのを極端にいいますと、国の指針をただ指をくわえて待っていても何も変わらないと思うのです。私も最後の方に少し話をしたのですが、まさしく地域発信といいますが、総合型地域スポーツクラブの認証登録制度がまもなくスタートするのですが、制度をどのようにするのかということや中央の誰かが決めてくれることをずっと待っているのではなくて、これを地域でどのように使っていくのかということや地域で考えてどんどんスタートしてしまった方が地域にとってもいいと思うのです。そのような意味では、お二人、地域のキーパーソンだと思いますので、キーパーソンを中心にして、地域のスポーツが盛り上がってもらえればと思います。

中垣内：ありがとうございます。笹山先生、いかがでしょう。

笹山：現在、さらに地域の町民の方のニーズが多様化してきているところもありますので、今後一人一人の望むことを限りなくクラブとして支えていければと考えています。

中垣内：ありがとうございます。西田先生、いかがでしょうか。

西田先生：内田先生のお話しにもありましたように、ジェントリフィケーションなのですが、地域で生活して仕事させていただいている私たちだからこそできるものがあると思いますので、その誇りをもっていいですか、志をもって、自分たちも仕事をしていきたいです。また今、実際私どものところに就職してもらった学生もいますし、今度の春もまた別の大学から私どものところに社員として入るのですが、我々の志を繋ぐ人が増え、その志をずっと繋いでいけるような組織でありたいですし、南関町を我々の手でこれからもつくっていききたいなと思っています。このような形でもっと全域に広がるようにまた力を尽くしていきたいと思っています。

中垣内：ありがとうございます。三人の先生方、貴重なお話、大変ありがとうございました。私たちも生涯スポーツ実践センターとして産官学、どのように連携していけるか、またボトムアップで地域をいかに主体的に動かしていくかということが非常に重要なのだなと改めて考えていくとともに今回の発表で伺った内容をヒントに大学としても地域連携活動をさらに深めていけたらなと思いました。今日は、本当に貴重な時間をありがとうございました。

ちょうど時間になりましたので、今回の講演会は以上で終わりにしたいと思います。皆さんよろしければ反応のところで三人の先生方に拍手をしていただくとありがたいなと思います。どうもありがとうございました。

先生方：ありがとうございました。

沼尾：先生方、ありがとうございました。

それでは、時間となりましたので、これで本日の協力者会議を閉会したいと思います。

本日は、ご多用中にもかかわらず三名の先生方、誠にありがとうございました。大変有意義な時間を共有できたのではないかと感じております。また、ご参加いただきました多数の皆様にもお礼を申し上げて、閉会したいと思います。本日は、ありがとうございました。

(了)